

[成果情報名] 山菜（マタタビ・モミジガサ）の育苗技術の検討

[要約]

山村地域の新たな栽培品目として、山菜のマタタビ及びモミジガサを対象に増殖と育苗技術について検討を行った。増殖については、マタタビ、モミジガサともに挿し木が容易で、高い発根率が確認された。育苗に関しては、施肥の種類による生長効果の違いを明らかにした。

[キーワード] マタタビ、モミジガサ、挿し木、育苗、肥料

[担当機関名] 林業試験場 特用林産部 [連絡先] 0739-47-2468

[部会名] 林業・木材部会 [分類] 指導

[背景・ねらい]

山菜類は山間の地形や環境に適用しやすく省力栽培に向いている作目が多く、高齢者等が取り組みやすい地域資源である。これらの増殖、栽培方法を開発することにより、山村地域の活用及び特徴ある特産品づくりと活性化に資する。

[成果の内容・特徴]

【マタタビ】

1. 2007年3月に発根促進剤を使用せず挿し木を行った結果、発根率は89%と高かった。
2. 挿し床に腐葉土を加えても発根に影響はなく、生育も良好であった（表1、図1）。
3. 発根した挿し木苗に、液肥①②（N:P:K=①6:6:6、②7:4:4）、鶏糞、化成肥料をそれぞれ施肥したところ、液肥①500倍区、②500倍区、化成肥料区が特に生育が良い結果となった（表2、図2）。

【モミジガサ】

1. 2007年5月に発根促進剤を使用せず挿し木を行った結果、発根率は93%と高かった。
2. 鶏糞200kg/a、鶏糞400kg/a、油粕400kg/aをそれぞれ施肥したプランターに定植した2年株の生育・収穫量を調査したところ、鶏糞200kg/a区が生育・収穫量ともに最も多くなった。（表3、図3、4、5）
3. 挿し木苗を林内に定植したところ、活着率は約8割と高いものの、夏季に枯死が目立ち、最終的な生存は約6割にとどまった。

[成果の活用面・留意点]

マタタビ、モミジガサの挿し木は容易でこれらのデータをもとに生産者個人で増殖可能である。今後、里山（林縁）や遊休地を活用した省力的な栽培方法について検討していく。

[具体的データ]

表1 マタタビ挿し床別発根率・生長量

挿し床	発根率	芽の平均伸長 (cm)
鹿沼土:砂 = 15:1	94%	3.6
鹿沼土:赤玉:腐葉土 = 2:2:1	97%	4.6
パーミキュライト	74%	3.6

注)各試験区の供試数:35

表2 マタタビ施肥別生育状況

	最大伸長枝長 (cm)	枝長計 (cm)	SPAD値
無施肥(対照区)	27	42	23
液肥① 500倍	87	191	35
液肥① 1000倍	65	130	31
液肥② 500倍	100	220	32
液肥② 1000倍	62	115	29
鶏糞	58	117	30
化成肥料	80	177	35

注)各試験区供試数:24

液肥①→N:P:K=6:6:6 (6~10月週1回 100ml施肥)

液肥②→N:P:K=7:4:4 (6~10月週1回 100ml施肥)

鶏糞→N:P:K=2.4:6.5:3.3 (用土10ℓ当たり90g施肥)

化成肥料→N:P:K=10:10:10 (用土10ℓ当たり45g施肥)



図1 腐葉土入りの挿し床への挿し木(6月)



図2 育苗中のマタタビ(9月)

表3 モミジガサ収穫量

試験区	収穫本数			1株当たりの収穫量	
	M	L	合計	本数	重量(g)
鶏糞200kg/a区	21	23	44	2.8	35
鶏糞400kg/a区	18	19	37	2.3	29
油粕400kg/a区	10	4	14	0.9	10

注)各試験区供試数:16株

収穫サイズ:M→茎長12~15cm L→茎長15~20cm



図3 収穫前のモミジガサ(5月)

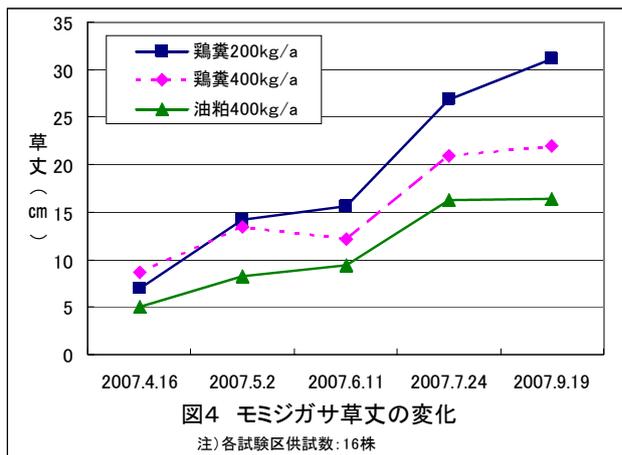


図4 モミジガサ草丈の変化

注)各試験区供試数:16株



図5 収穫したモミジガサ

[その他]

研究課題名:木の国いちおし産品創出事業

予算区分:県単

研究期間:平成15~19年

研究担当者:杉本小夜、加藤万季、城戸杉生

発表論文等:業務報告(平成17~18年度)

